



▲写真1 (左上) 花のフレーバーが楽しめる「香り緑茶」
 2 (左下) 海外で人気の抹茶
 3 (右) 衛生管理が徹底された抹茶の充填工程

株式会社 流通サービス

海外ニーズを捉えた商品開発に挑み 静岡茶を世界に広める

茶の産出額で首位を維持してきた静岡県は、2019年、鹿児島県にその座を初めて明け渡した。近年、他県から攻勢を受けている県内茶業界の中で、海外に販路を見出し、事業を拡大している企業がある。菊川市に本社を構え、茶の生産から販売までを一貫して行う(株)流通サービスだ。茶園の上で太陽光発電を行う“茶畑ソーラー”に取り組むなど、環境問題にも積極的で、販売先から高い評価を得ている。



▲写真4 自社の茶園に広がる“茶畑ソーラー”

緑茶の生産も行う茶問屋への転身

緑茶の生産から加工、販売まで手掛ける(株)流通サービスが創業したのは1989年のことである。焼津市で茶問屋を営む(株)ハットリ製茶の四代目で、当時専務だった服部吉明社長の“茶業界の流通サービスを充実させたい”という思いから、新会社として分社・設立したのが同社の始まりだ。

服部家には、みかん問屋を営んでいた初代が愛媛県産のみかんの台頭に苦しい思いをしたことを教訓に、既存事業が軌道に乗っているうちに新しいことに挑戦する気風が受け継がれている。当然、服部社長もこのような薫陶を受けて育っており、まだ煎茶の売れ行きが順調だった30年前から、「煎茶に変わる第二、第三の矢を見つけなければならない」と考えていた。紅茶やコーヒーの取扱いを始めて、買付で海外を訪れた際に、緑茶のサンプルを配って意見を収集したところ、抹茶の評価が高く海外展開の可能性を強く感じたという。それからは、抹茶に合う品種や加工方法など

を研究するために、京都・宇治や愛知・西尾に足繁く通った。

ところが、静岡県産の茶の品種は97%が「やぶきた」であり、煎茶としての品質は高いものの、抹茶とするには相性が良くない。そこで、服部社長は抹茶に合う品種で碾茶（抹茶の原料となる茶葉）を生産するために2007年、茶農家と「農事組合法人天竜愛里ふあむ」（浜松市天竜区）を設立し、抹茶の生産に踏み出した。

土づくりからこだわった高級オーガニック抹茶

同社は10年ほど前から、本格的に海外への販路開拓を仕掛け始め、展示会などで和服を着て点前を実演するなど、お茶文化の発信にも積極的に取り組んでいる（写真5）。ここ3年ほどで活動の成果が出始め、アメリカの大手スーパー、ホールフーズ・マーケットでの取扱いが始まるなど、現地での知名度は急上昇している。現在は、売上の3割ほどが輸出向けで、数年内には輸出が国内販売を越える勢いだ。

取引価格についても高い水準を維持できている。海外で流通している抹茶は、きめの粗い商品が多く、石臼で丁寧に挽いた同社の抹茶は高く評価されており、国内価格の3倍ほどで取引されているという。

また、同社は静岡県認定のエコファーマーとして生産から販売までを一貫して行っており、土づくりからこだわった有機栽培を実践することで、



▲写真5 海外の展示場でお茶を点てる服部社長（左から二人目）

オーガニックを求める海外消費者のニーズに応えていることも大きな強みになっている。

こだわりの有機栽培は価格面だけでなく、海外の厳しい残留農薬規制にも適合しているため、バイヤーの評価も高い。最近では、加工工場を自動化し、FDA（アメリカ食品医薬品局）の承認を得るなど、衛生管理を徹底することが信頼につながっている（写真3）。

費用を収益に変える「茶畑ソーラー」

本社の周囲の茶園は、茶樹から2～3mの上部にソーラーパネルが設置されている（写真4）。同社が「茶畑ソーラー」と呼ぶこのシステムは、太陽光を茶の生産と発電に活用しようというものである。抹茶の原料である碾茶の栽培では、生産過程で3～4週間に渡って遮光する期間が必要で、茶農家はそのために高額の被覆棚を設置するのだが、その棚に相当する部分を太陽光パネルにすることで、設置費用を売電収入で賄う仕組みである。

売電収入のおかげで、茶葉の販売収入だけの時と比較して経営に余裕が生まれ、一時的に収入が減少する茶樹の植え替えにも取り組みやすくなった。同社は、この仕組みを利用して、耕作放棄地を見事に茶畑として蘇らせている。現在は7カ所で茶畑ソーラーが稼働しており、今後も拡大していく計画だという。

発電した電力は、売電するだけでなく被覆作業の自動化にも利用している。「将来的にはすべての作業を自動化し、茶畑ソーラーを動力源とすることで持続可能な生産体制を整えたい」と、服部社長は意気込む。こうしたサステナブルな取り組みは、海外のバイヤーからの評判も良く、同社のアピールポイントになっている。

飽くなき新商品開発

同社は高級抹茶（写真2）の海外輸出が軌道に乗った今でも、常に新たなチャレンジを続けている。県の茶業研究センターが開発し、普通

**COMPANY
DATA****株式会社 流通サービス**
代表取締役 **服部 吉明**

所在地	菊川市倉沢340
創業	1989年（平成元年）
資本金	1,000万円
従業員数	12名
事業内容	茶の生産、加工、販売（輸出）
T E L	0537-35-6868



煎茶や深蒸し煎茶に次ぐ第三の煎茶と期待されている「香り緑茶」（写真1）のさらなる改良にも尽力している。同社は、茶業研究センターでは研究していない茶の品種で試作を重ね、さまざまな香りをまとった緑茶を作り出すことに成功しており、中小企業庁のJAPANブランド育成支援事業にも採択されている。香り緑茶自体が新しい製法であり国内での認知度は高くないが、すでにオランダのバイヤーから予約が入っており、今後の展開が期待される。

また、ストレス緩和効果などがあるとされるGABAを豊富に含んだ「GABA玉露」（写真6）の開発にも成功、2020年10月に特許を取得した。通常、GABAが含まれていると苦味などが出てしまうが、同商品は高濃度GABAと玉露本



▲写真6 2020年10月に特許を取得した「GABA玉露」

来の風味を両立させており、さらに、1杯分の粉末を個別包装して取扱いを容易にするなど、消費者のニーズを的確に捉えている。このような商品開発は、生産から加工、販売までを一貫して行っている会社だから成せることであり、今後も消費者の生の声をもとに挑戦を続けていくという。

伝道師として世界中に静岡茶の良さを広める

現在、世界40カ国ほどと取引しており、忙しく駆け巡る服部社長だが、その合間を縫って海外茶農家の支援やセミナーを行っている。2021年度にはロンドンで、自社商品の販売と、お茶の魅力や栽培方法などを伝えるファーマーズショップを出店する計画であり、「世界中に静岡茶の良さを広めることが私のライフワーク」と服部社長は語る。

静岡茶を世界中に広めるには若者の力も必要であるため、服部社長は若い世代に茶文化を伝えるべく地元中学校での茶樹植え替え授業などにも注力している。大学生のゼミを同社で開くこともあり、近年、その中から入社希望者が出るようになった。このような活動をしてきたことで、茶農家の高齢化が懸念される中、同社の社員は20代から30代がほとんどを占め、活気にあふれている。次代を担う若者ととともに、静岡茶の伝道師の取り組みは続く。

研究員 中澤 郁弥
Nakazawa Fumiya